

編集後記

本号より、新たに編集委員10名にご就任いただき、今後の編集体制に参画いただくことになった。この他、編集協力者2名にも編集委員に就任いただいた。本誌の趣旨に沿った高い見識を備えておられ、本誌企画に既にご尽力をいただいている先生方として、これまでの編集委員より推薦をいただいた。本誌は昨年（2022年）度に50周年を迎え、本年度で51年目となる。充実した編集委員会体制で、新たな展望を描くことができればと思う。

本号には、「21世紀メディカルAIフォーラム 第1回21世紀メディカルAIシンポジウム 予測科学としての臨床医学のフロンティア」の講演録を掲載した。「生成AI」は毎日のテレビ報道でお茶の間にまでその活躍ぶりが伝えられているが、AIの医療応用について、日本の第一線の研究者からの講演が、贅沢に発表スライドを盛り込んで講義録として編纂された。この領域における技術開発の最先端の情報を概観するとともに、倫理的・社会的インパクトについても議論を深める好機となるだろう。

また、筆者が参画して日本生命倫理学会の年次大会企画として開催したウクライナ臨床試験に関するシンポジウム記録も掲載した。本誌50巻3号にその概要を国際製薬医学会ニュースレター（*IFAPP TODAY*）に報告した記事の和訳を掲載したが、そのfull transcriptionを英文で作成したものである。カラー版は本誌websiteで公表している。ウクライナの研究者らによる講演では、過酷な軍事攻撃を受ける中でも、phase 1ラボを含めて、日常生活としての臨床試験を継続しようとする人々の姿が浮かび上がる。多くの患者にとって臨床試験は重要な治療の選択肢となっており、困難なリスク・ベネフィットの比較考量を迫られている。規制当局、スポンサー企業、アカデミアからの国際的な支援を受けて、そのクオリティを維持しながら臨床試験を継続する彼らの力量は「奇跡」のようだ。戦時下の臨床試験の科学と倫理についての国際社会の学術的議論の深まりに、ささやかながら貢献しつつあることは本誌にとっても貴重な経験である。

新型コロナウイルス感染症ワクチン、子宮頸がんワクチンの安全性解析に関する論争、救急車による病院間転院搬送に関する議論など、ホットな話題をめぐる論考も掲載され、社会的議論をさらに深める契機となるだろう。治験論文の学術誌公表要件がなくなり四半世紀が経とうとしているが、今後本誌が臨床試験、人を対象とする研究をめぐる理論誌として、多様な意見を持つ人々が出会い、協働し、論争を交わす場（forum）となることを期待している。

（栗原千絵子）